

レポート提出拒否の訴え

文学部地理2回生有志15名

3月1日から2日にかけて我々の手元に、提出用とおぼしき封筒を同封して「3回生以下レポート論議」なるものが届いた。恐らく雑察するに文学部当局はこのレポート提出によって後期試験を実施出来得ると考えているのであろう。向成にこのようにしてレポート課題を個々の学生に郵送し、また郵送によってそれを提出するといった変則的な手段で後期試験を進行しなければならぬのか。我々はこのような態度を取った文学部教授会或いは学校当局に対し、はっきりと提出拒否することを宣言する。更にこの事態に一方の声明を出す得ない教授会の無責任、無能力に、現在の立命教学崩壊の実態を見ざるを得ない。

しかしこうした教授会の実態を視る我々自身を、中川会長のバリケードが突きつけた「向いかけ」に照らして、検証した揚句我々も又自から痛切な自己変革の場に出されていかならう。即ち本来の「学習者」としての学生たる自覚が、その立命館大学においていかなる存在であり、またその存在の場たる大学とはいかになるものかという徹底した検証を通しての自己変革を必要とする。それによって我々は新たな大学創出への主体者として登場し得るであらう。そして我々はこの2ヶ月近い間、こうした自からへの向いかけを行う一方、民主立命の衣をまとったこの大学の襟裾を2月12日の全共斗の諸君と議長・理事会との大衆闘争の場で重視した。故に我々は新なる自己、新なる大学の創造へ向いつつあるのだ。

この時に単にスケジュールだからという理由で後期試験を再行しようとする教授会の意図は、むしろ我々をまた旧来の立命教学体例へ同じ込めようとする動きとさえ受けとられる。或いは我々のこうした自立した思考をレポートを書くという作業によって西取消滅させようという意図すら感じられる。もとより我々はレポートの課題に解答するという作業を完全に否定するものではない。我々がこの一年向行って来た学問なるものがいかになるものであったのかという検証を抜きに語れないにしても、例えは「地理学的に見た人間について」自己がいかに述べ得るかを試してみる作業も必要ではあろう。しかし学友諸君こうした作業を今回のこのレポート提出の中で現実には我々はいかにせざるべきかをもう一度考えてみよう。そこに我々は「学習者」としての自己に恥じない作業があるであろうか。そうした作業をせざるを得ない状況とはいったい何であろうか。

学友諸君！ 我々は学習者としての自己を再構築しよう。そしてその第一歩をレポート提出拒否の姿勢をとることによって踏み出そう。我々には知るべきだ。いかなる知識も無償には自己のものとはならず、自己の力とはなり得ないことを。だからこそ我々はレポート提出という媒介によって自立した思考の教養と、よどんだ学究の日常性の中に自己を埋没することを恐れるのだ。

我々は少なからぬ教授会、大学当局が過去20年間の立命民主体例、立命教学の徹底的批判に基づく、今後の大学改革への明確な方針を提示するまで、レポート提出を拒否し続ける。